

ボアジチ大学

交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

入学当初からの目標であったイスタンブールのボアジチ大学で過ごした留学生活は刺激的で充実したものだった。何より、授業だけでなく日々見聞きする何もかもが自分にとって新たな学びとなる生活は私の興味関心を刺激し、コロナでオンライン生活だった自分自身の好奇心を呼び覚ますような期間であった。ここではいくつかの出来事や私が感じたこと、学んだことについて報告させていただきたい。

海外渡航が初めてで緊張7割だった自分がトルコについて最初に感じたことは人の活気強さと親切さである。イスタンブール内の公共交通機関はチャージ式のICカードを乗車時に利用するのだが、空港から学校へ向かうバスで私のカードが反応せず非常に焦っていた時、後ろの方が私の分まで無言でピッと通してくださった。またあるトルコ人は駅内の階段ではスーツケースを突然持って階段の間運んでくださったりと、人の親切さに非常に驚いた。それと同時に感じたのは事前のトルコ語勉強の重要性だ。英語の勉強を重視していた私にとって、渡航当時は最小限の挨拶しか知らなかった。渡航当日上記のような形で人に助けられた時、思うようにお礼が言えず悔しい思いをした。それ以降、語学勉強に加え自分の気持ちをジェスチャーや熱意で伝えることも同時に行なっていく、徐々にコミュニケーションの形を築いていくようになった。

ボアジチ大学では社会学部で学んだ。大学では自分の学部から最低2科目受講していればあとはどの学部からでも自分の興味ある科目を受講できる。自分の場合は主に社会学の授業に加え、トルコ現代史等を受講した。週1時間あったヨガの授業は私にとって最高のリフレッシュの時間にもなり非常に楽しかった。どの授業もレベルが高く、毎週計200ページほどのリーディングが課されていたため、留学当初の私にとってはいくらかやっても到底読み切ることができなかった。しかし、先生が提示してくださるおさえるべきポイントをおさえたり、自分で興味を持った部分をネットで調べながら勉強したりすると自然に膨大なリーディングでも苦と感ぜないようになった。講義中も先生に許可をとりレコーディングして何度もわからない部分をリピートして聞いたり、クラスメイトと質問しあったりして理解を深めていくことができた。試験も基本的にはどれも難しく感じたのだが、power and inequality という授業の試験では洋画レビューの問いがあり、授業で学んだ社会学のキーワードと何かを自分の中で創意的につなげることを目的とされた面白い試験を経験することができた。

授業以外では黒海地方に住む友人の家にお邪魔させていただき、トルコの家族・親族関係や農村、ムスリムの断食や祝日を学ぶことができた。春休みのラマダン（断食）祝日で1週間ほど滞在した際は、友人の親族計50人以上に会わせていただき非常に驚い

た。友人の家族との会話で、ムスリムの断食に関する考え方だったり、世界から見たムスリムへの偏見だったりを話し、それは新しい価値観に触れた瞬間だった。初対面の私の話も親身になって聞いてくださったり、新しい経験のためにパラグライダーや料理体験も参加させてもらったり楽しかった。他の学校の友達も実家に遊びに来るよう誘ってくれた子が多く、家族もウェルカムでホスピタリティ精神が高くすごいなと感じた。

一方、留学中の5月14日には、トルコ大統領・国会同日選挙があり、トルコ国内でその雰囲気を経験する非常に貴重な期間があった。日本とは全く異なる政治への意識や姿勢がそこにはあった。渡航当初から選挙の話は時々聞いていたが、特に当日1ヶ月前からは学校もカフェもレストランもその話で持ちきりだった。カフェで初めて会った店員さんとも突然政治について話し始める友達。どれだけトルコの人々にとってこの選挙が重要か日常生活からひしひしと伝わってきた。第1回の投票率は87.04%と日本に比べて高く、特に若年層において日本との政治意識の違いは明らかだった。詳しい情報を持ち自分の考えを各々に持つ友達と政治について話す中でいかに自分が日本について知らなかったかということも同時に思い知らされた。

また、異文化交流を通して学んだことを伝えたい。トルコでは上述したようにムスリムの数が多いが、現地で味わったそのグラデーションは私にとって刺激的なものであっ

た。宗教的慣習としての礼拝の回数、場所、ヒジャブの着用、飲酒など人によってそれぞれで私が教科書だけでは感じるのできないことを体感した。特に、宗派や家族によって宗教に対する考え方は多様であった。私にはある友達との会話の中で1つ印象に残っていることがある。一神教を信仰し生活することに馴染みのない私はその友達とよく宗教や文化について質問しあっていた。彼女はトルコムスリムの中では少数派であるAlevilikの信者であり、現在のトルコにおける政治的状況や多数派との違いについてたくさん教えてもらった。私が気になったことを聞く中で、彼女は毎回「正確なことを伝えたいから。」と言いながら、言葉選びに時間をかけながら現状や、彼女の考えについて話してくれた、その時、そこまで真剣に伝えようとしてくれることへの嬉しさと、自身の文化や宗教に誇りを持って暮らしている彼女の姿勢に尊敬の念を覚えた。私も日本の文化や政治についてたくさん質問されたが、その彼女との会話以降いつでも正しく伝えることを心がけるようになった。異文化交流で非常に大切なことを実際に教えてもらった気がした。

日本と全く異なる環境で大変なことはありながらも、楽しさと学びで溢れていたトルコでの日々は初めに述べたように、私自身に変化をもたらした。大学入学とコロナ感染拡大が被り、思い描いていた生活が送れず、自由時間は家に引きこもりがちであった

中、この留学はネット上ではなく現地を自分の目で見て感じることでしか得られない新たな疑問の発見や感動について再確認する機会であった。ネットにはもちろんハイクオリティで有益な動画や情報が溢れているが、自分で体験する喜びや人との出会いは自分だけのものだと確信できた。現在は海外だけでなく日本でも色々な場所を訪れたり、より多くの人と話がしたいと思うようになった。「好奇心を持ち続けそれに向かっていく人生」。この留学経験はこれから社会に出ていく中で、自分の軸ともなるようなものを与えてくれた。

最後に、この交換留学という貴重な経験をさせてくださった静岡県立大学とボアジチ大学の関係者のみなさまに感謝を伝えたい。渡航に関する手続きやボアジチ大学とのコンタクトなど、数えきれないほどのサポートをしてくださった。特に担当の佐藤先生は留学に関する相談にも親身に乘っていただき、感謝してもしきれない。ずっと応援してくれた家族も含め、たくさんの方々のおかげで終了した私の留学期間は今までの人生の中で一番実りのある時間だった。ありがとうございました。